

呼びかけ一語文におけるイントネーションの型と機能について(その2) —受け手的なタイプの場合—

李 紫 娟

0. はじめに

呼びかけ一語文には、呼びかけることを通して、聞き手に何かをさせようと働きかける意図をもつ、働きかけのなもの、発話現場で生じた事態への反応としての受け手的なものがある。一語文の呼びかけ語は、基本的には、この二つのいずれかになると思われる¹。以下の例(1)は働きかけのなもの、(2)は受け手的なもの例である。

(1) 賢太郎：{愛子に向かって} シュンイチ ナルミの携帯番号、教えろ

愛子：絶対、嫌 {と拒否する}

賢太郎：同僚の三浦君

三浦：あっ、いや、あの。{頭を別の方向へ向ける} (花)

(2) [お昼、愛子は三浦と外でご飯食べているところ、賢太郎が会社に来ているのが見かけた]

愛子：{走りながら、歩いている賢太郎を呼び止める} お父さん！お父さん！

賢太郎：{驚いて、振り返る} おっ、愛子 (花)

そして、働きかけの呼びかけ一語文のイントネーションは、大きく [上昇調イントネーション] と [下降調イントネーション] に分かれ、両者の違いは、話し手と聞き手の間にある「矛盾」つまり意図のギャップの有無であると見られる²。これに対し、受け手的な呼びかけ一語文のイントネーションの特徴と機能はどのようなものか。また、働きかけの呼びかけ一語文との違いは何か。以上を明らかにすることが本稿の課題である。

1. 先行研究

ここでは本稿が扱う受け手的な呼びかけ一語文に関わっている研究を紹介する。感嘆文の概念(『言語学大辞典-6 術語編』)と働きかけの呼びかけ一語文のイントネーション(李(2013))を取り上げる。

¹ 李(2012)参照。

² 李(2013)参照。

1.1 感嘆文について

『言語学大辞典——6術語編——』には「感嘆」について、「ある対象に対する、話し手の喜び・怒り・悲しみ・おそれ・驚き・意外など、感動や情緒の表出をいう（pp.247左）」との記述がみられる。また、「広義の感嘆文」について、「強い感嘆や感動が表出された文を、一般に広義の感嘆文という（pp.247右）」との記述がみられる。そして、「感嘆文は特有のイントネーションをもっており、高いピッチで特徴づけられることが多い。そして、感情の強弱・性質にしたがって、イントネーションはさまざまに変動する（pp.247左）」との記述もみられる。

上記の記述によると、本稿で扱う「受け手的な呼びかけ一語文」は、広い意味の感嘆文に含まれると思われる。なお、本稿で扱う「受け手的な呼びかけ一語文」は、一般的な感嘆文と区別される。つまり、「受け手的な呼びかけ一語文」の感嘆の対象は一般的な事物より、話の相手に限定され、そして、言葉に発する文内容は相手をさし示すに限定される点において異なるのである。

1.2 李 (2013)

李 (2013) では、働きかけの呼びかけ一語文のイントネーションを、大きく「上昇調イントネーション」と「下降調イントネーション」に分け、後者は、さらに「緩やかな下降調」「急下降調」「平—急下降調」に分けた。そして、上昇調と下降調の違いは、話し手と聞き手の間にある「矛盾」つまり意図のギャップの有無であると見られることがわかった。さらに下降調においては、その「矛盾」の大きさの違いにより、「緩やかな下降調」「急下降調」「平—急下降調」の順で、ピッチの幅が大きくなり、また全体の長さが長くなるなどの特徴が見られると結論づけた。

2. 調査方法

2.1 調査対象

呼びかけ一語文のイントネーションを考察の対象とする場合、具体的な場面の中で生じる多様な現象を網羅的に観察する必要がある。しかし、自然談話からの用例収集は非常に困難であるため、本稿では、テレビドラマのセリフを対象にし、呼びかけ一語文の発話を生の音声データとして記録した。音声データは下記のとおり600例収集できた。音声データとは別に、該当場面のセリフはテキストに書き起こし、場面情報も付記した。なお、演技性をともなうドラマでの使用は自然談話での使用とは異なるのではないかという問題があるが、筆者、およびネイティブの見たところ、それが問題になるような例は、ほとんどなかったことを付言しておく。

- ・『花嫁とパパ』（フジテレビ2007年6月26日放送終了）全12回うち1-8回（339例）
- ・『泣かないと決めた日』（フジテレビ2010年3月16日放送終了）全8回（261例）

2.2 対象とした用例の範囲

表1 対象とした用例

呼びかけ語	呼びかけの性質	計	合計
呼びかけ一語文	働きかけの	43	163
	受け手的	120	
文と共起する呼びかけ語		437	
合計		600	

本稿では、考察の対象を、独立してもちいられた受け手的な呼びかけ一語文に限定する（表1 網かけ部分参照）。

2.3 調査方法

本稿では呼びかけの発話を音響分析するのであるが、実際に使用されている呼びかけ語は、語彙、語形、アクセントが一定ではなく、話し手も多種多様である。さらに、雑音やBGM（背景音楽）などが加わり、採集した音声データを同一基準ダイレクトに処理することは不可能である。そこで、本稿では、便宜的に次のような方法で条件を齊一にして分析を行った。

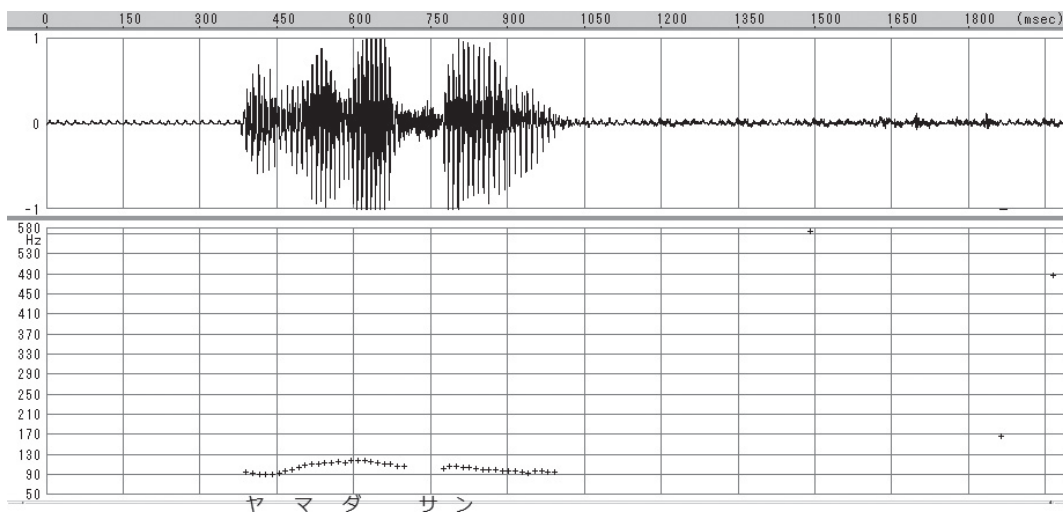
- ・実際の発話データから典型例10例を選び出し、日本人ネイティブにそのイントネーションを模倣してもらい、録音した。その場合、呼びかけ語はすべて「山田さん」という核のない平板型アクセントの語に統一してある。
- ・模倣してもらったネイティブは男女二人を起用した。なお、両者で模倣された音声のイントネーションは、ほぼ一致する。さらに、元のテレビのデータと照合した結果、ほぼ一致していることが確認された。
- ・使用するソフト：SUGI Speech Analyzer（ANIMO製）

以下、男性の方の音声を分析し、それに現れたイントネーションの型とその意味機能を考察する。

3. 考察

まず呼びかけとしてではない、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」のピッチを図で示す。以下のような図になる。

図1 ニュートラルなピッチ曲線



呼びかけでない単独で発話された「山田さん」のピッチ曲線を分析すると、全体の高さの変化の範囲は90Hz～120Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分（ダ）が-0.1dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が2.8dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは217msであり、全体610msの35.6%を占めている。

以下、受け手的な呼びかけで発話された「山田さん」を上記のニュートラルな発話と比較しつつ、分析する。

結論を先取りすると、受け手的な呼びかけ一語文のイントネーションは、大きく [下降調イントネーション] と [平調イントネーション] の二つのタイプが観察された。以下では、(5)～(16)で実際の発話データを示し、ピッチ分析では、「山田さん」に置き換えた発話の分析データを示す。

I 下降調イントネーション

[下降調イントネーション] は、さらに [急下降調イントネーション] と [語尾微上昇調イントネーション] に分かれる。[下降調イントネーション] は、主に「相手の発言・行動・状態に対する驚き」を表す発話に使われる。

I-I 下降調イントネーション—①急下降調イントネーション

[急下降調イントネーション] とは、後半部 [(s) aN] が急下降調イントネーションをなしていることを指す。次の図2～4は急下降調のタイプに属しており、そのピッチの幅は少しずつ異なる。

[急下降調イントネーション1]

(3) 仲原：{すこし離れたところから鈴木の声が聞こえて、そちらを見る} 鈴木。

鈴木：{頭を上げて、声のした方を見る} お～、どうした？ {仲原のところまで歩く}

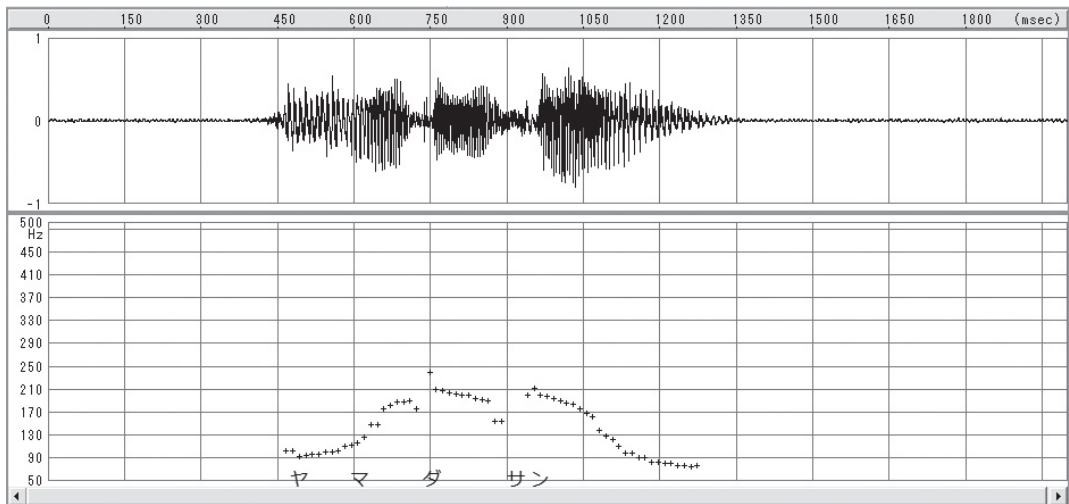
仲原：朝から案内の下見なんだよ。来週、フランスのグランエール社の重役が来日するからさ。

鈴木：あ～、出た、あれだ。

仲原：{鈴木の際にいる角田に気づいて、驚く} あれっ？ きゅうちゃん。

角田：お疲れ様です。{笑いながら、会釈する} (泣)

図2 急下降調イントネーション1



例(3)は、発話の現場で相手の存在に気づいたと同時に、相手へ呼びかけている場面である。「山田さん」のピッチ曲線を分析すると、全体の高さの変化の範囲は80Hz～220Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分(マ)が5.3dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が4.5dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは300msであり、全体820msの36.5%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅が大きいことがわかる。また強さについて、全体的に弱く、さらに、前半より後半の方がやや強いことがわかる。長さに関しては、全体的には長いものの、前半と後半の比率はかわらないことがわかる。

[急下降調イントネーション2]

(4) 賢太郎：そんなじゃな、愛子と結婚できないぞ。

三浦：はい。

愛子：あれ？結婚？ {驚いて賢太郎を見る} お父さん！ {大興奮} やだ！三浦さんの

こと応援してくれてるの！ {大興奮} (花)

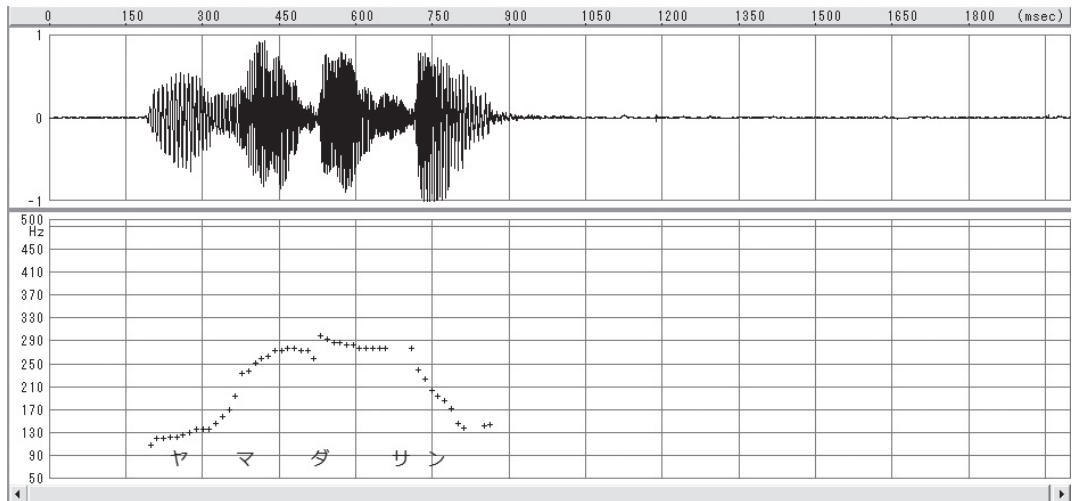
(5) 房 江：はっきり申し上げます。お嬢さんとは結婚させられません。

賢太郎：うちも、娘を嫁にやるつもりはありません。

三 浦：{驚く} 宇崎さんのお父さん。

房 江：なら、どうしていらしたんですか？ (花)

図3 急下降調イントネーション2



例（4）（5）は、相手の発言に対する「驚き³」の場面である。全体の高さの変化の範囲は92Hz～293Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分（マ）が-1.2dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が-1.0dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは160msであり、全体650msの24.6%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較するとピッチの幅が大きいことがわかる。また強さについて、全体的に強く、さらに、前半より後半の方がやや強いことがわかる。長さに関しては、後半が著しく短いことがわかる。

[急下降調イントネーション3]

(6) 賢太郎：頑張るな！頑張るな！ まっ、とにかく今日は帰りたまえ。十分食ったろ、なっ？

三 浦：いえ、ちょっとまだ…

愛 子：お父さん！ちょっと…

三 浦：まだ、残ってる。

³ 本稿の「驚き」は、発話の現場において、話し手が予期しない相手の発言・行動・状態に対する無意識的、瞬間的情緒を指す。

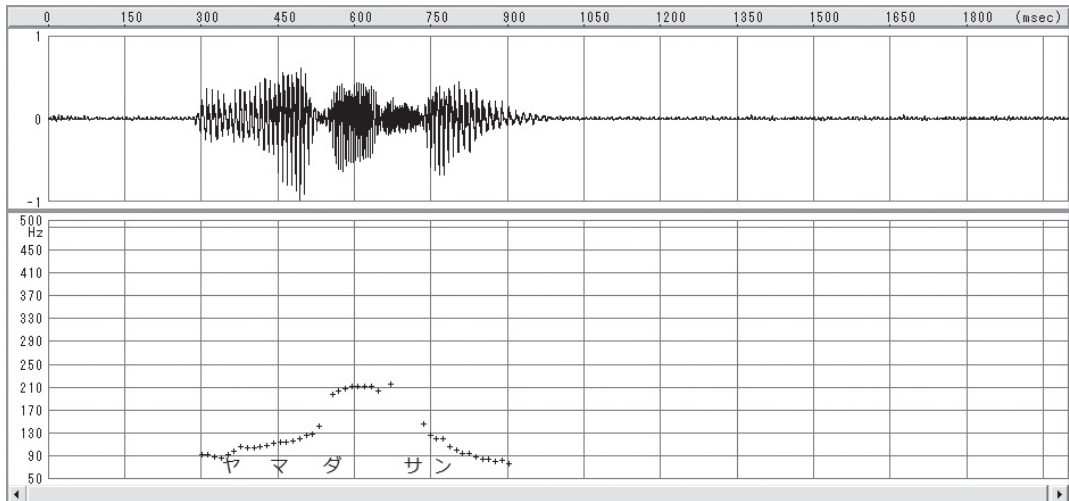
賢太郎：{座ってご飯を食べる} えーと…

三 浦：ご馳走さまでした…

愛 子：三浦さん。

三 浦：{カバンを持って帰ろうとする} それじゃ失礼します。{最後に、愛子を見る} (花)

図4 急下降調イントネーション3



例(6)は、相手の行動に対する「驚き」の場面である。全体の高さの変化の範囲は89Hz~220Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分(マ)が-2.9dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が-6.1dBである。前半が後半よりはるかに強いことがわかる。そして後半部 [(s) aN] の長さは200msであり、全体600msの33.3%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅が大きいことがわかる。

以上、受け手の呼びかけ一語文の[下降調イントネーション]のうちの[急下降調イントネーション]を考察した。その結果、[急下降調イントネーション]は、「相手の存在への気づき」、あるいは「相手の発言・行動に対する驚き」のような、発話の現場での話し手の無意識的・瞬間的な反応に使われることが分かった。そして、これらの「気づき」あるいは、「驚き」は弱い場合もあれば強い場合もあり、連続的である。この連続性はピッチの幅の大きさに反映しているといえる。つまり、「気づき」あるいは「驚き」が弱い場合はピッチの幅が小さく、反対に、強い場合はピッチの幅が大きいのである。

I-II 下降調イントネーション—②語尾微上昇調イントネーション

[語尾微上昇調イントネーション] は、後半部 [(s) aN] が下降調イントネーションをなしているが、最後の語尾の部分が微上昇するパターンである。

(7) [夜11時を過ぎても、愛子がまだ帰ってこないため、賢太郎と三浦は心配している。そのとき、やっとベルが鳴り、玄関を開けると、鳴海が現れる]

賢太郎：シュンイチ ナルミ。

三 浦：室長！

鳴 海：{愛子を背負ったまま家に入る}

賢太郎：{驚く} あっ…愛子！

三 浦：宇崎さん！

(花)

(8) 美奈子：{様子をみるために、わざと宇崎の家の近くまでジョギングする。外から家の中を窺おうとしているところ、賢太郎を見かけて} ひっ！？

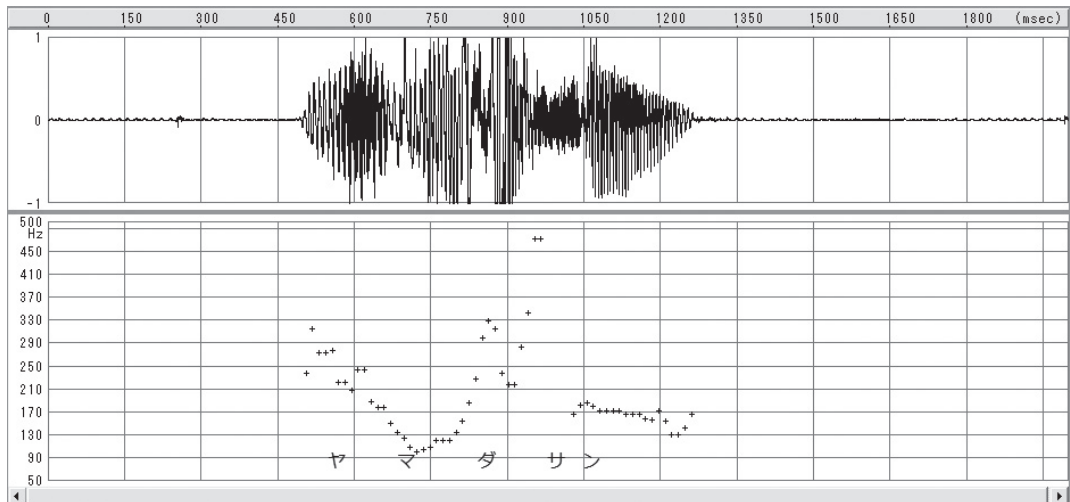
賢太郎：{さわやかな笑顔で} おっ、美奈子、おはよう。

美奈子：{驚いて} け…賢ちゃん

賢太郎：{空を見ながら} さわやかな朝だな、気分、爽快、爽快！ハハハ…

(花)

図5 語尾微上昇調イントネーション1



例 (7) (8) は、相手の状態をみて驚く場面の発話である。全体の高さの変化の範囲は90Hz～330Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (マ) が5.3dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が0.0dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは250msであり、

全体750msの33.3%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅の違いはそれほど大きくないことがわかる。また強さについて、全体的に非常に強いほか、前半が後半よりはるかに強いことがわかる。

例(7)(8)はいずれも「驚き」の発話であるが、これらの例には、「驚き」と「感情的評価⁴」の両方が入っていると思われる。しかし、「驚き」の方がはるかに強いと思われる。そのため(3)～(6)と同様、[下降調イントネーション]が用いられる。しかし、「感情的評価」も少なからず入っているため、[急下降調]ではなく、[緩やかな下降調]になり、さらに、語尾は「微上昇」している。

以上[下降調イントネーション]をまとめると、受け手的な呼びかけ一語文のうち、最も受け手性がつよい(つまり最も感嘆文の性質に近づいている)「相手への気づき」という認識的な場合と、「相手の発言・行動・状態に対する驚き」の場合は、基本的に[下降調イントネーション]を用いることと言えるであろう。そして、これらの「気づき」、あるいは「驚き」が弱い場合もあれば、強い場合もあり、連続的であると思われる。また、この連続性はピッチの幅の大きさにも反映しているといえる。具体的に言えば、「気づき」、あるいは「驚き」が弱い場合は、ピッチの幅が小さく、反対に強い場合は、ピッチの幅が大きいのである。しかし、発話の現場での話し手の無意識的・瞬間的な反応に「感情的な評価」が加わる場合もみられ、この場合は、[急下降調イントネーション]ではなく、[緩やかな下降調イントネーション]に変え、さらに[語尾微上昇]も加わる。

II 平調イントネーション

[平調イントネーション]は、郡(2003)で指摘されたように「顕著な高低変化はない」型のイントネーションである。郡(2003)では、この型の文末イントネーションは、「機能としても特別なものをもたない」と指摘している。しかし、受け手的な呼びかけ一語文において、この種のイントネーションは「感情的評価」を表す場合に用いられることが分かった。

以下の図6～11は、後半部同じ[平調イントネーション]を成している。しかし、前半部はその感情の強弱、性質によってピッチの幅などが異なる。そして、図6～8は呼びかける相手が感情的評価の対象となる場合であり、図9～11は呼びかける相手が感情的評価の共有者となる場合である。

[平調イントネーション1]

例(9)は、話し手は相手に嫌な態度をとられた後、その相手への呼びかけによって、自分の不満な感情をその相手へ表出している例である。

⁴ 本稿でいう「感情的評価」とは、話し手が相手あるいは第三者から何らかの事柄を受け、そして相手への呼びかけによって、その事柄に対する話し手の感動や、喜びや、驚喜などプラス的な感情評価、あるいは非難、心配、失望、愚痴、嘆きなどマイナス的な感情評価をさす。

(9) 愛子：三浦さんは、お父さんと話したいって。

賢太郎：{怒る} こっちは、話なんかしたくないんだ。金輪際、二度と俺の前に姿を現すな
て、そう言っとけ。

愛子：{ショックを受ける} お父さん (花)

図6 平調イントネーション1

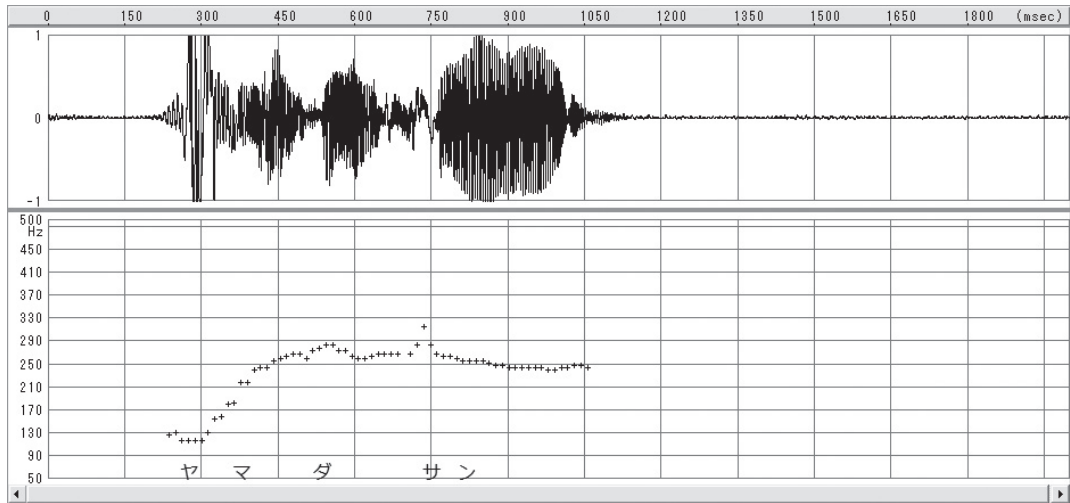


図6において、全体の高さの変化の範囲は110Hz~280Hzの間であり、後半部 [(s) aN] の高さ変化の範囲は230~267Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (ヤ) が4.4dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が0.5dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは335msであり、全体850msの39.4%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅が小さく、特に後半部 [(s) aN] のピッチの幅がニュートラルの場合とほぼ同じでことがわかる。また強さについては、全体的に非常に強く、前半が後半よりはるかに強いことがわかる。長さに関しては、全体的に長く、後半部が長いことがわかる。

[平調イントネーション2]

例(10)は、話し手は相手から好ましくない行動を受けた後、その相手への呼びかけによって、相手を非難するという感情を表出している例である。

(10) 安奈：{愛子をあわててしまい、コーヒーを安奈の洋服にこぼす} キャッ!

愛子：{自分が汚した洋服を見て、びっくりする} あーっ!

安奈：{席を立て、泣きそうな顔で宇崎をにらむ} 宇崎!

愛子：怖くて、目をつぶったまま すみません！

(花)

図7 平調イントネーション2

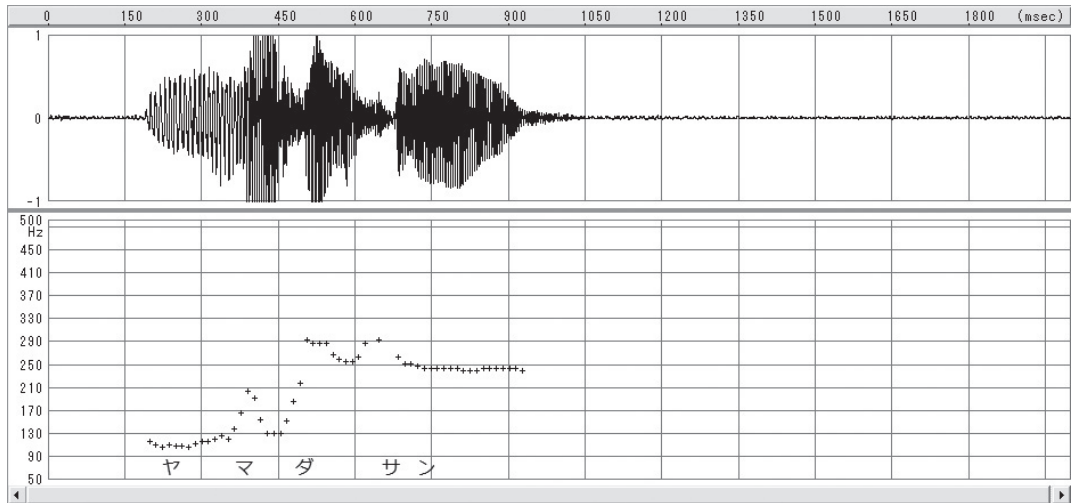


図7において、全体の高さの変化の範囲は100Hz～290Hzの間であり、後半部 [(s) aN] の高さ変化の範囲は236～256Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (ヤ) が2.4dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が-2.2dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは338msであり、全体820msの41.2%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、全体のピッチの幅が大きいものの、後半部 [(s) aN] のピッチの幅がニュートラルの場合より小さいことがわかる。また強さについては、前半が後半より圧倒的に強いことがわかる。長さに関しては、全体的に長く、後半部が長いことがわかる。

[平調イントネーション3]

例(11)は、話し手は相手から励ましの言葉を受けた後、その相手への呼びかけによって、自分の感動的な感情をその相手へ表出している例である。

- (11) 安 奈：会社を出ようとするが、愛子のそばで止まる 寿退社するなら、クビになってもかまわな い じゃない？
- 愛 子：えっ？
- 安 奈：結婚するでしょ？ 宇崎のくせに、ふん。
- 愛 子：くせ…くせにつて、そんな、えっ…えっ？
- 金 山：会社を出ようとして、愛子のそばで止まり、手で愛子の肩をたたく 絶対やめない

でよ、宇崎さん！

愛子：先輩

(花)

図8 平調イントネーション3

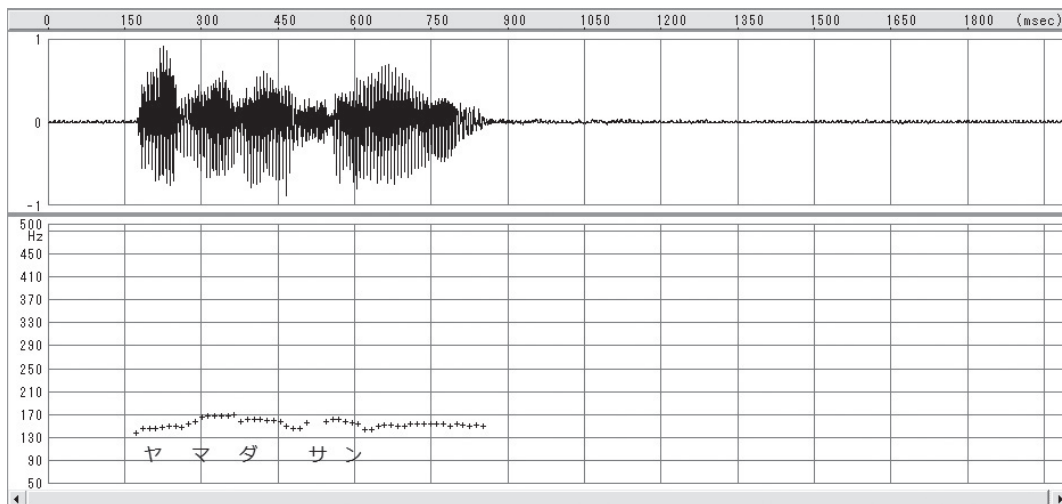


図8において、全体の高さの変化の範囲は130Hz～170Hzの間であり、後半部 [(s) aN] の高さ変化の範囲は145～162Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (マ) が-3.1dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が5.0dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは300msであり、全体730msの41.0%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅が小さく、特に後半部 [(s) aN] のピッチの幅がニュートラルの場合より小さいことがわかる。また強さについては、全体的に非常に弱く、前半が後半より強いことがわかる。長さに関しては、全体的にやや長く、後半部が著しく長いことがわかる。

以上、呼びかける相手が感情的評価の対象となる場合の平調イントネーションの音響的特徴をみてきた。例 (9) (10) は、自分に対しての相手の態度や行動に対する不満や非難などの感情をその相手に向かって表出するタイプである。例 (11) は、自分に対しての相手の態度に対する感動的な感情をその相手に向かって表出するタイプである。

図6～8からもわかるように、感情的な評価の場合において、後半部 [(s) aN] はピッチの幅に差がほとんど見られない [平調イントネーション] を用いる。しかし、その感情的な評価はマイナス的かプラス的吗によって、前半部 [ja ma da] のピッチの幅が異なってくる。つまり、マイナス的な「感情的評価」の場合において、前半部 [ja ma da] のピッチの幅が大きい [上昇調イントネーション] を用い、プラス的な「感情的評価」の場合においては、[平調イントネーション] を用いる。また、

その幅の大きさの増減は、感情の激しさに左右される。つまり、感情が高まるほど、ピッチの幅が大きくみられるのである。

さらに、発音の強さにおいて、マイナス的な「感情的評価」の場合も、プラス的な「感情的評価」の場合も、前半部が強いことが指摘できる。しかし、マイナス的な「感情的評価」の場合は、第一音節 [ja] が最も強いのに対し、プラス的な「感情的評価」の場合は、第二音節 [ma] が最も強い。そして、後半部 [(s) aN] の長さにおいては、その長さの増減も感情の激しさに左右されるとみられる。つまり、感情が高まるほど、後半部が長いと言えよう。

次に、感情の共有を聞き手にもちかける場合をみてみよう。

[平調イントネーション4]

例(12)は、第三者(賢太郎)から好ましくないことを受けた愛子と三浦に対し、美奈子が呼びかけによって、自分の心配する感情を呼びかける相手へもちかけている例である。

(12) [賢太郎が美奈子の店で三浦と愛子が別れたことを美奈子に話した直後、愛子と三浦と一緒に店に入る]

美奈子：「一緒に入ってきたので、驚く」愛子ちゃん、三浦君。

愛子：三浦さんのお母さんに会ってきた。ちゃんと話し聞いてもらえた。

美奈子：じゃあ、お母さんと仲直りできたの？ (花)

図9 平調イントネーション4

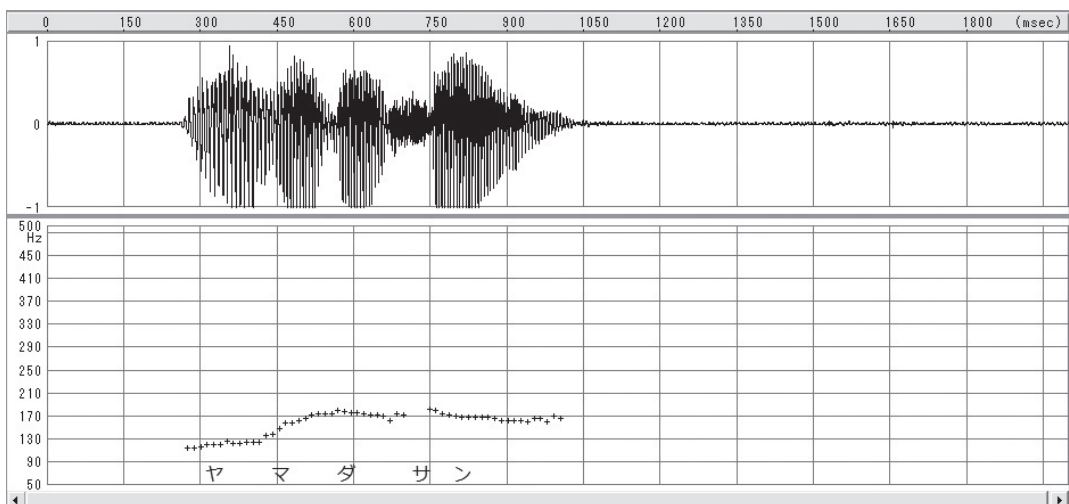


図9において、全体の高さの変化の範囲は120Hz~178Hzの間であり、後半部 [(s) aN] の高さの変化の範囲は53~178Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (ヤ) が-0.4dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が-1.1dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは270msであり、全体770msの35.0%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅が小さく、特に後半部 [(s) aN] のピッチの幅がニュートラルの場合とほぼ同じであることがわかる。また強さについては、全体的にやや強く、前半が後半より強いことがわかる。長さに関しては、全体的にやや長く、後半部が長いことがわかる。

[平調イントネーション5]

例 (13) は、話し手 (愛子) は第三者 (賢太郎) から好ましくないことを受けた後、呼びかける相手に自分が被害を受けたという感情をもちかけている例である。

(13) 愛子：わたしもう二十歳だよ。自由に、好きなことさせてよ。{賢太郎の顔をみる} 分かってくれた？

賢太郎：それが、結婚してうちを出てくってことか？

愛子：{怒る} 分かってないじゃん。

美奈子：{ジョギングしながら、二人に近づく} おはよう。

愛子：おはようございます。{美奈子に向かう}

美奈子：また、親子で漫才してんの？

愛子：{泣きそうな様子で、手を美奈子の肩にあてる} 美奈子さん (花)

図10 平調イントネーション5

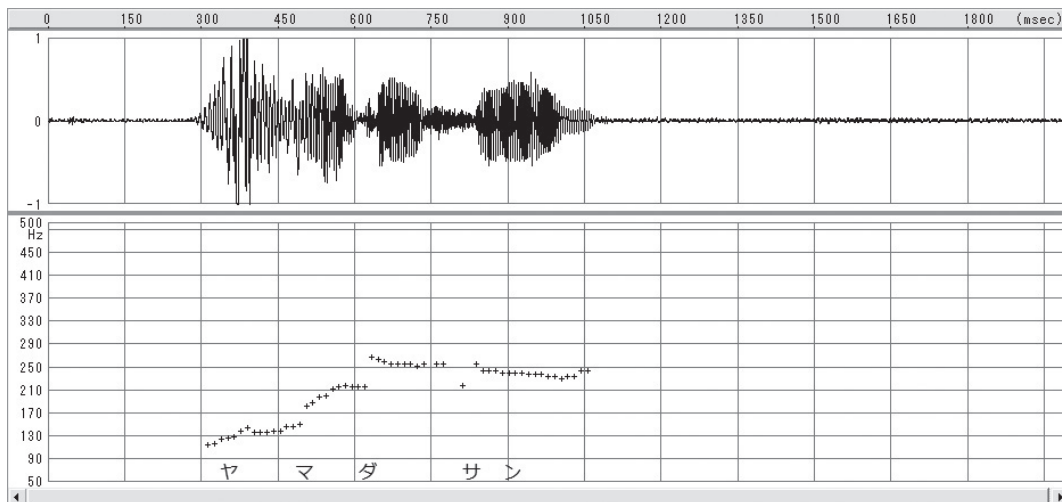


図10において、全体の高さの変化の範囲は134Hz～260Hzの間であり、後半部 [(s) aN] の高さ変化の範囲は225～247Hzの間である。そして強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分（ヤ）が2.8dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が4.7dBである。後半部 [(s) aN] の長さは250msであり、全体755msの33.1%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、全体のピッチの幅が大きいものの、後半部 [(s) aN] のピッチの幅はニュートラルの場合より小さいことがわかる。また強さについては、前半が後半より圧倒的に強いことがわかる。

[平調イントネーション6]

例(14)は、第三者から好ましくないことを受けた後、話し手は呼びかける相手に自分の歓喜する感情をその相手へもちかけている例である。

- (14) 三 浦：あれ？ 挨拶をしに行くって、僕たちの交際を認めてくれたってことじゃない？
 愛 子：{振り返って、三浦を見る} 三浦さん…
 三 浦：{うれしそうに} 宇崎さん。 {愛子と抱きしめようとする}
 愛 子：{少し近づくが、急にになにか思いつく} ダメ！ダメダメ！ (花)

図11 平調イントネーション6

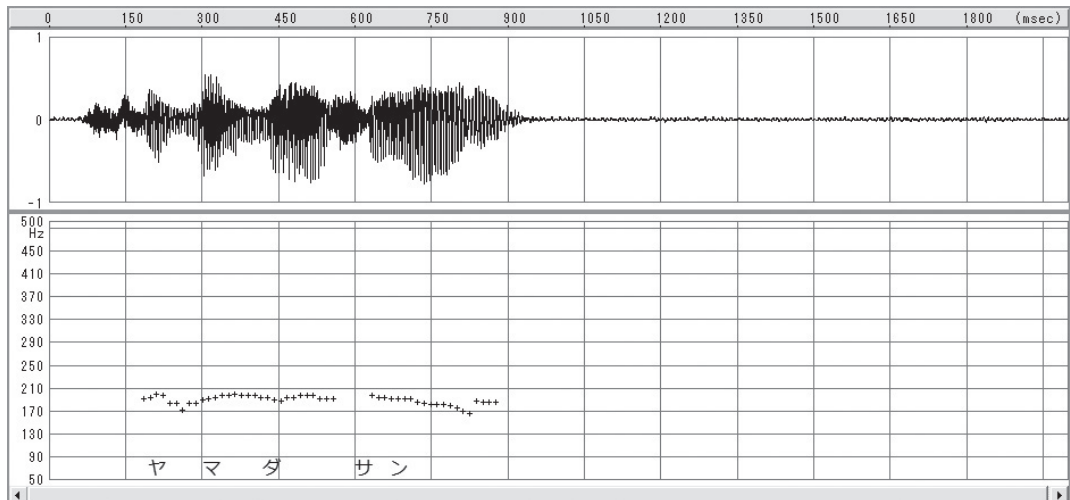


図11において、全体の高さの変化の範囲も170Hz～206Hzの間であり、後半部 [(s) aN] の高さ変化の範囲も170Hz～206Hzの間である。強さは、前半部 [ja ma da] における最も強い部分（ダ）が-5.1dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分が-3.5dBである。後半部 [(s) aN] の長さは275ms

であり、全体840msの32.7%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、ピッチの幅が小さいことがわかる。また強さについては、全体的に非常に弱く、後半が前半より強いことがわかる。長さに関しては、全体的にやや長いことがわかる。

例(13)(14)は、例(9)～(11)とは違い、感情の起因が呼びかける相手によるものではない点で共通している。(13)は、第三者に起因する被害的感情の共有を聞き手にもちかけるタイプである。また、(14)は、話し手と聞き手にとって望ましい状況が訪れたことにより、喜びの感情の共有を聞き手にもちかける呼びかけ一語文である。

こうした感情の共有を聞き手にもちかけるタイプの呼びかけ一語文例(12)(13)(14)の音響的特徴は、基本的には呼びかける相手が感情的評価の対象となる場合例(9)(10)(11)とほぼ共通しているようである。

4. まとめ

以上、見てきたように、受け手的な呼びかけ一語文のイントネーションは、大きく[下降調イントネーション]と[平調イントネーション]に分かれる。李(2013)で考察した働きかけのな呼びかけ一語文のイントネーション的特徴と比較してみると、そこでは観察されなかった[平調イントネーション]が観察された。そのほか、働きかけのな呼びかけ一語文の場合、話し手と聞き手の間にある意図的なギャップの大きさは働きかけ性の強さの違いに関わり、さらにその違いは[下降調イントネーション]のピッチの幅の大きさに反映されていることが分かった。これに対して、受け手的な呼びかけ一語文の場合において、そのピッチの幅の大きさは、驚きの程度と感情の激しさに左右されることが分かった。

また、本稿の結果と李(2013)の結果をまとめて分析すると、受け手的な呼びかけ一語文と働きかけのな呼びかけ一語文の間には連続性があるといえる。つまり、もっとも受け手性がつよいものは「驚き」であり、「驚き」と「働きかけのな」な呼びかけ一語文との間に位置しているのが「感情評価的」な呼びかけ一語文である。さらに、最も受け手性が強く、つまり、もっとも感嘆文の性質に近いと思われる「驚き」は、受け手的な呼びかけ一語文において、[上昇調]ではなく、[下降調]を用いて表現することが本稿で明らかになった。

参考文献

- 井澤 瞳 (2013) 「感嘆文のイントネーション一形と機能一」岡山大学大学院社会文化科学研究科修士論文
- 郡 史郎 (1997) 「日本語のイントネーション」『日本語音声 2—アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』、pp.169-202、三省堂
- 郡 史郎 (2003) 「イントネーション」『朝倉日本語講座 3—音声・音韻』、pp.109-131、朝倉書店
- 天沼 寧・大坪一夫・水谷修 (1978) 「日本語の韻律」『日本語音声学』くろしお出版
- 森山卓郎 (1997) 「一語文とそのイントネーション」『文法と音声 I』、pp.75-96、くろしお出版
- 李 紫娟 (2012) 「一語文としての呼びかけ語」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第33号、pp.185-204
- 李 紫娟 (2013) 「呼びかけ一語文におけるイントネーションの型と意味について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第35号、pp.147-163